
自走都市上の未来

亥月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自走都市上の未来

【Nコード】

N1098Z

【作者名】

亥月

【あらすじ】

空中に浮かんで歩く自走都市Flow上。幼稚な少女と、律儀なトカゲの二年後の未来は、過去とは何も変わっちゃいない。変わったのは、少しだけ複雑になった二人の心と関係のみ。

今日も今日とて、恋愛模様の進行速度は、時速二〇キロ前後止まり。

(前書き)

「自走都市上の恋人」の、二年後に当たる続編です。

今日も晴れてる。

進行速度は、この都市にしては少し速い方だ。それ以外は、さしていつもと何も変わらない。

そういえば、物資搬入サービスの依頼を入れていたんだっただか。
メヒウス・リボン

道理で、空中レツドカーペットの軌道上からずれ始めた訳だ。

だとしたら、勤勉さと情報通なのが売りの、どこでも輸送便の連中が、そろそろ来る頃だろう。
デリジェンス インテリジェンス ガジェット

『そういうことなんだ、テラ。早くシャワーを浴び終えて、服を着る』

清浄な湯気が立ち込める、無菌室に似たバスルーム。抗菌加工の、至って清潔なその壁面に埋め込まれたスピーカーから、男の音が響く。いたって義務的な口調だ。

いつもは淡い色に光る、長く伸びた鳶色の髪が、陶器の如くにすべやかな美しい背に流れ落ちた。そのまま、呆然とした顔でシャワーコック代わりの伝導パネルに手をかざし、ヘッドから噴き出す湯を止める。

湯けむりで繊細にぼやけるラインを描く肢体に、丸いかたちの水滴だけを纏った少女　テラはしばらく、瞬きもせず、男の声を放ったスピーカーを凝視していた。それから、やっと一つ大きく呼吸する。

細やかな首筋を水滴が滑り、整った造形の鎖骨で留まった。

それを合図に、彼女はさつと振り返ると、凄まじい音を立てて磨^{アイ}り加工のバス・ドアを開け放った。

「口ホツクっ！ 一体なんの真似よっ！」

シンク・イントウ・レゼル
怒り心頭といった感じで、テラがりビングへと入ってきた。ボデイ・ドライヤーの温風も浴びずにバスルームから出てきた彼女は、瑠璃色に彩られた瞳を逆三角形に吊り上げ、床に敷かれたラグの上に素知らぬ顔で寝そべる恋人を睨みつける。

『おれがコールを掛けようかと思ってから、実に三一分二七秒もの時間が過ぎ去った。気は短くないが、長くもない』

「お風呂に入ってるときは極力話しかけないでって、きみにはいつも言ってるじゃない！」

スピーカー越しに、彼女の恋人　口ホツクは気怠げな様子でそうばやいた。べつたりと腹をラグに押し付けて、無警戒にくつろぐその姿に、テラはいよいよ感情を昂らせていく。

「あたしだって、ちゃんとタイムスケジュールを考えて行動してるの！ いちいち心配しないでったら！」

『ああ、そう。ならさっさと着替えてきてくれ。タイムスケジュール通りに行けば、もうすぐガジェットが来る頃だろ』

いつまでも子ども扱いが我慢ならない様子の彼女は、培養皿の上みたいな空間の抗菌棚から引っ張り出したバスタオルを纏っただけ。硬くざらざらとした鱗に覆われた、堅牢な印象のコモドドラゴンの彼は、呆れた風にはたりと長く伸びる尻尾を振った。

「なんで、いつまで経っても保護者気取りの口振りでしか話せないわけ！？ きみ、あたしの恋人じゃない！」

『その問いに関しては、もう食傷気味だ。おれたちの種族は、食生活ヲデリケートに構築しないと、すぐに内蔵疾患が出る。そこら辺を気遣ってくれると、非常にありがたい』

相変わらずのすつとぼけた返答。語尾に至っては、あくびが混じっている。テラは悔しさに顔を紅潮させ、バスタオルを握る指の関節をぐつと白ませた。屈辱で、その左手さえも小刻みに震えている。

「このつ、サディスト嗜虐趣味！ 冷血野郎！」

『その嗜虐趣味は、早くあんたに服を着てもらって、一刻も早く休息レストを要求したいんだが』

このようにして、ロホックはなにかの儀礼のように、いつもテラを怒らせているのだ。それこそ、本当に毎日である。それと同時に、この儀礼もそろそろ折り返し地点に向かう様子であった。

ついに堪忍袋の緒が切れたか、テラがわずかに潤んだ目のまま金切り声で叫ぶ。

「ロホックなんか、大っきらい！」

『……ああ、そう』

儀礼の折り返し地点は、大体いつもこう。

しかし、それこそ一種の風習^{カスタム}じみたこの儀礼の仕掛け人である彼の方は、未だにお決まり（カスタム）のこの台詞には慣れない様子だった。

『おい、テラ』

「うっさい」

『悪かったって言うてるだろ』

「うっさいうっさい。近寄らないで、無体毛種族。かーわいいウサギかなんかにでも生まれ変わってから来てよ」

『……たしかに、おれは精神^{スプリット}を分割した、多岐肉体共用型生命体の試験体^{ポッドプラットフォーム}だが。残念なことに、おれの分割選択体のバリエーションに、かーわいいウサギは無い』

「知ってるっつの。なんか余計に腹が立つ」

『とばっちりだ』

バスルームのドア越しに、一進一退の言葉の攻防戦を繰り広げている最中。もう輸送便の職員が外で待っているというのに、テラがひどく機嫌を損ねてしまい、そこから出てこなくなっただ。

仕方無しに、もう少し待っていてくれと電子音声で口ホックがそう告げると、年季が入ったような初老の職員は、電子ビジョン越しに鷹揚に頷いてくれた。ありがたいことだと、微細な電腦チップの

中で呟きながら、彼は彼女の機嫌を取ってみる。

『おれが悪かったよ。おれが。だから出てきてくれ、もうガジエツトの運び屋が来てる』

「きみが受け取ってくれば。あたし、まだ未成年だし。保護者の義務なんじゃないの」

『おれも精神的には未成年なんだが』

テラの皮肉っぽい口調に、ロホックは心底困った様子で尻尾を頼りなげに揺らした。

『あんたのそもそもの保護者は、どこぞの研究ラボ所で実験に明け暮れてるか、月面専用特殊居住宅の中で、五〇〇〇〇ドルもする口紅を塗ってるだろう、その二人だ。断じておれじゃない』

「知るかそんなの」

『……いい加減、機嫌を直せ』

情けない声で、ロホックがスピーカーからそう零す。背中の中ばまで伸びた髪をいじくりながら、きちんと乾かした身体にタイトな服を纏ったテラは、つまらなそうな顔で質量たっぷりな睫を伏せる。

「じゃあ」

『じゃあ、なんだ』

一呼吸置いてから、テラが髪をいじくる手に握った髪留めを、歳相応にふくらんだ胸に押し付ける。

「あたしのこと、すきって言って」

彼女は、素直ではない彼に長年からかわれてきた割には、とても純に育ったのだろう。それだけで、この儀礼はやっと終わりを迎えるのである。

それに。根本的には、彼の愛の言葉がその合図であるからして、この儀礼が成り立っているのだから。

「あー……。うん」

歯切れが悪く、そう呟いてから。

彼女に手助けされ、やっと保護者気取りのマスクを剥ぎ取ることができた彼は、最後まで煮え切らない様子でとっくの昔から煮え切っている答えを囁く。

「變じてる」

予想以上の返答に、テラがすぐにバスルームを飛び出して。二年前よりも長く伸びた髪を耳に引っ掛けてから、口ホックの鼻先に口づけるまで、あと三秒後。

今日も、自走都市Flowの上の恋愛模様は、一切速度を上げない模様。

制限時速が上がるのは、いつの日になることか分からない。

(後書き)

書き終わった途端、「終わったー。くそったれー」と無意識に呟いていました。無意識って怖いこわーい。

前作は深夜テンションで書き上げた迷走ロマンスですが、続編であるこいつも深夜テンション全開です。この二人に関しては、夜にかその本性を現しません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1098z/>

自走都市上の未来

2011年12月4日01時49分発行